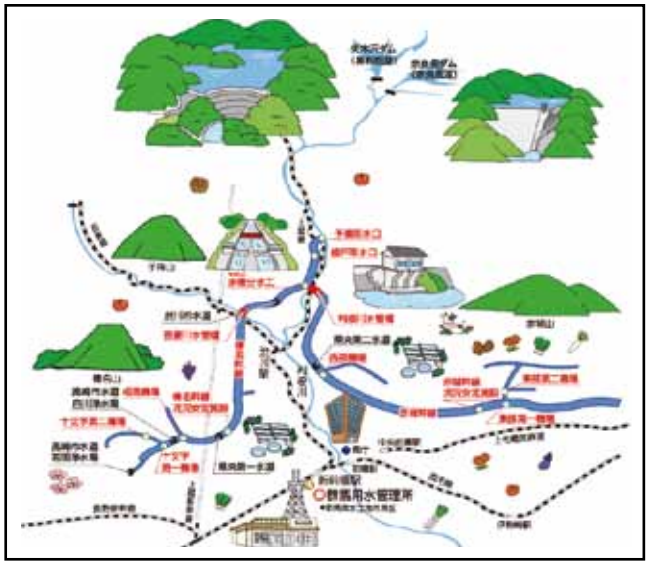
ささえる力 Power

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

チーム

末永く地域に愛される群馬用水であるために

群馬用水は、矢木沢ダム・奈良俣ダム等を水源として農業用水と水道用水を供給している。昔から赤城山・榛名山の裾野は、水の少ない地域だった。このため農家では、田畑で使う水に苦労しており、満々と流れる利根川の水を使用したいと願っていた。その願いを叶えるために、昭和39年～45年にかけて建設されたのが群馬用水である。現在では、農業用水として7市町村（群馬県内）に、水道用水として8市町村（群馬県内）に用水を供給している。



水利権協議と配水管理

「河川の水を使うには、河川を管理している機関の許可が必要です。『水利権』と言います。」穏やかな印象の本間さんは語る。「利根川から取水するためには、河川管理者である国土交通大臣に水利権協議をし、同意が得られて取水可能となります。この水利権で定められた水の量に基づいて取水し、水路を通じて農業用水や水道用水を皆様に不足が生じないように届けています。それが『配水管理』です。」

季節や時間によって必要とされる水量は異なる。水が無駄にならないように幹線水路全体の配水状況を確認しながら１日の取水量を何パターンかに分け、水量を調節しているという。「特に夏場は農業用水の需要量が多く、かつ、１日の中での変動も大きいことから、１日を７～８程度のパターンに分けてゲート操作を行い、水量の調整をします。」

約 6,300 ヘクタールの農地と 5 箇所の浄水場に、水資源機構が管理する約 62ｋｍの幹線水路と土地改良区や水道事業者が管理する広範囲に張り巡らされた水路網を通じて水は届けられる。「水路は、365 日休むことなく水を流し続け、皆様の生活に必要な水を送っています。昔から多くの人々に切望され、大勢の方々が尽力された結果の上に成り立っているということを忘れずに、水を大切に使って欲しいと思います。」

日本初の試み！？農作物の高温障害対策に予備取水口を活用

平成 24 年 8～ 9 月の配水業務は、例年とは異なった対応を余儀なくされたという。2 年前の平成 22 年は猛暑

Profile

前群馬用水管理所

本間　昭宏 *Honma Akihiro*

平成5年水資源開発公団（現水資源機構）入社。長良導水、中部支社、愛知用水、豊川用水等、主に水路事務所に勤務。水利権協議や水路の調査設計、水路工事の監督等を経験。農林水産省及び財団法人への出向を経験し、平成21年１月より群馬用水管理所勤務。４月から木曽川水系連絡導水路建設所設計工務課長。

のため、群馬県では農作物が未成熟となる高温障害が発生した。このことを受け、水資源機構としてどのような対応を執ることが可能かについて検討を行った。「その中で、高温時は農業用水として比較的低い温度の水を使用することが高温障害対策として有効であるとされていることから、通常取水している本取水口よりも水温が数度低い『予備取水口』の水を使うことができないかと考えました。」予備取水口から取水ができる条件についても水利権で定められているため、実現に向けて国土交通省との協議を重ねた。作物の高温障害を防止する目的で、取水条件の変更に向けた協議を行ったのは、全国でも初めての事例だった。土地改良区をはじめ、本社や管理所の担当者が一丸となって水利権協議を進めた結果、7 月に国土交通省からの同意が得られた。そして、高温障害が発生する恐れが高まった 8 月、初めて予備取水口を活用した取水を試みる運びとなった。

「この効果であるとの確証はできませんが、昨年は高温障害が発生しなかったと聞き、本当に良かったと思っています。」と当時を振り返りながら安堵の様子を浮かべた。

「仕事で苦労していると思ったことはほとんどありません」

実はその裏で、管理所の職員の業務は容易ではなかった。通常取水している本取水口は水位が一定であるが、予備取水口は水位変動が大きく、取水量の管理が難しいため、頻繁なゲート操作が必要とされる。「通常時には 1 時間ごとに行っている取水状況チェックの頻度を適宜増やしたり、交代で夜間の対応を行ったりもしました。」そこにさらなる試練、11 年ぶりの利根川の渇水による取水制限が重なる。「利水者の皆様に 10%の取水制限への協力をお願いしました。利水者の皆様も大変だったと思います。」

こまめな取水・配水状況のチェック、取水・配水操作、現地での配水状況の確認、関係機関との通常時以上に密な連絡調整など…業務に追われる日々を、チーム一丸となって取り組み、乗り越えることができたという。「今回のように、みんなで一つの仕事を無事終えることができたのは、チーム・利水者・協議先などの関係するすべての方々のおかげであり、これらの方々に感謝しています。」感謝の気持ちを忘れない本間さんは当時を振り返る。「今回の対応は、新たに費用をかけて対策を講じたのではなく、既存施設を効果的に活用することで可能となりました！」と、すこし誇らしげに微笑んだ。

「仕事は生活の一部です。日本の当たり前のライフラインを『水』という面から支えるためにその一端を担うのは自分の役目だと思っていますから。」と仕事に対する強い志を語る。

地域と共存する施設であってほしい

地域との関わりを大切にしている本間さんは、機構の視点だけではなく相手の視点を常に考えている。関係者の意見や考え方を積極的に聞き取りしたり、現場に出向いて自分の目で配水状況や農作物の生育状況を確認するように努めているという。「私が転勤しても、群馬用水がなくなることはないですから。群馬用水と地域の方々との良好な関係を考えて行動するように心がけています。」

簡単なことではない。苦情があれば何度も足を運び、理解していただく努力をする。職場内でも同様に、自分の業務範囲だけでなく、全体の中で自分ができること、何をすべきかを常に意識して行動する。「上司部下ではなく『チーム』だと思っています。チームワークでこれからも群馬用水を支えていきたいと思います！」

相手を思う気持ち、感謝の気持ちを常に忘れない、仕事へのまっすぐな情熱が伝わってきた。

「自分たちの供給している水が、農作物の栽培や日常生活に不可欠な水道のお手伝いをしていると思うと、なんだかうれしくなります。」と遠慮がちに話す本間さんは、3 人の小学生のお父さん。さいたま市内の自宅から新幹線通勤をしているとのこと。「毎朝始発の新幹線での出勤が大変では？」と聞くと、「終電に間に合わず、帰宅できないことがあっても、家が一番です。」と小さく微笑んだ。

「ささえる力」は、ホームページの“採用情報”にも掲載しています。